

眞贋の記

眞實の記

舟橋聖一

新潮社版



昭和四十二年一月五日 印刷
昭和四十二年一月十日 發行

定價 七〇〇圓

著 者 舟 橋 聖 一

發行者 佐 藤 亮 一

發行所 株式會社 新 潮 社

東京都新宿區矢來町七一
電話東京(280)大代表一一二一
振替東京八〇八

眞實の記

目次

眞
實
の
記



序

詞

祕密といふほどのことではなくとも、人にはうつかり喋^{しゃべ}れないことがある。一生のうち、二度や三度ではきくまい。家内や子供にはそらうそぶき、仲のいい友達にもひた隠し、日頃私淑してゐるその道の先輩にさへ、うちとけて語れない。と云つて、生死に関するやうな事件ではない。多寡が女とのありふれた失策なのに、ひどく大事に祕藏して、誰にも云はずに死んでしまふ……。

——歴史上の事變にしても、もつと真相を語つておいてくれれば、後世の者がどんなに助かつたか知れないのに、いかに世紀を震撼させるやうな興味的な大事件でも、當事者の物語るところは、ほんの概略にすぎないから、前後撞着、とかく曖昧なことが多くて、核心を掴むといふには到らない。

そのくせ、人間には、他人に知られたくない話を、こつそり書いておくといふ全く矛盾したもう一つの慾望が存在する。時には、それが衝動的に、また本能的に出る場合すらありうるのである。

死んでも云はないとか、殺されてもこれだけは、自分の祕密だと思ひこらしてゐるのに、そ

れを書き遺したいとか、誰か一人だけに、話してから、死にたいとか、相互背反の二つの心が存在するのは、やはり書くといふことがあつてはじめて、事實が定着し、實在したことになると思ふからだらう。

慶吉もこの矛盾には、悩まされてきたが、若い時分は、誰しもさうであるやうに、自分の一生を、どうせ反故紙か鋸屑程度に思つてゐたので、日記をつけたり、自分の歴史をふりかへつて見ようなどとは、思つたこともない。

その上、筆をとる商賣にはいつたくせに、紺屋の白ばかまとやら、筆不精もいいところで、旅先からの繪葉書一つが億劫なのである。

然し、昔の名將、豪傑、嬌妓などの手紙を読むのは、面白い。讀み出すと、次から次と讀み漁つて、時のすぎるのも忘れる位で――。

しかも、ながながと丁寧に書き綴る中に、必ず一ヶ處か二ヶ處は、謎のやうなことが出てきて、慶吉は首をひねらざるを得ぬ。

譬へば――信長が愛妾らしいふもとと呼ぶ女のもとへ出した文とか、太閤が淀殿や秀頼（ひろひ）に書いた消息とか、大石がお輕につき藩醫寺井玄溪へ後事を託した書簡とか、遊女夕霧が伊左衛門へ口中の痛みを訴へた思ひの丈とか、みなすらすらと書いてあるが、それでゐて、ところどころに、深い謎が秘められてあつて、第三者の窺（き）窺（ひ）をゆるさぬものがある。

慶吉はさういふ親書の面白さを知るにつれて、ますます、自分の手紙を書くのが怠惰になり、なかんづく、惚れた女に宛てた戀のたよりなどは、二十代のはじめに、二つ三つ、ものしたことがある位で、殆んどペンを執つたこともない。さういふ文章が、のちの證據になるのを怖れる心もないではないが、それだけではない。事實、信長にふもとといふ女のゐたことは、「ふ

もじまゐる のぶ」などと書いたその文があればこそわかるので、若し彼が消息を送らなかつたら、他の資料のどこにも、ふもじの名は出て来ないのだから、彼女は永遠に、その實在を示すことがなかつたらう。うつかり女性に手紙を書けないといふ好個の例である。

秀吉がわが子秀頼に逢ふごとに、口を吸つたといふのも、桑田さんの見つけた彼の手紙によつてだけわかる話である。文祿四年正月、大阪からお拾宛に出したもので、

「……やがて参り候て、口を吸ひ申すべく候。また、われわれ留守に人に口をおすはせ候はんと思ひまゐらせ候……」とあるのがそれだ。太閤自身書いてゐるのだから、傳説ではない。然し、わが息子の口を吸ふとは、異常なことで、普通の今日の常識では、赤ん坊の頬べたを吸ふ程度であるから、太閤の愛し方には、謎が残る。それにしても、四海天下を制定した英雄でも、わが子には眼がないことがよくわかる。自分の留守に、人が拾の口を吸ひはしないかと心配してゐるのも面白い。

——大石が山科で寵したお輕に子供をつくり、それを京へ置去りにして、主君の敵吉良を討つべく東下りをする際、おのれの死後、お輕は何で暮してゆくか、身二つになつてから、子供の育て方はどうしたらいいか、大分氣が揉めるやうで、

「玄溪へ頼み候二條出產のことも、出生申し候はば少々金銀遣はし云々」と、正直に一筆を加へてゐる。お輕の考證は、ふもじと違つて、多少は散見するが、この手紙ほど、判然と彼女の實在を證したものは、ほかにあるまい。多分大石は、お輕との情事を、他の浪士の手前極秘にしたかつたにちがひない。

復讐を目標に、女房を離縁したのは、あつくそれを断つて、おりくの實家石東家に累の及ぶのをきらつたためであるが、そのあとで、京都寺町二條の二文字屋といふ板木屋の娘を、女中

に雇つて、これに手をつけてしまつたので、大石とすれば、心中忸怩^{とくし}たるところがあつたにもかかはらず、竹田出雲の作劇術によつて、六段目七段目の華やかな舞台に再現させられたのである。

扇屋の抱へ夕霧と伊左衛門の中に、子供があつたことも、その文の中に出てくる。昔、大阪新町の吉田屋で、夕霧の手紙を、桐の箱へ入れて、特別の客に見せたことがある。戦後のことはわからない。彼女が書いて訴へた「口中の痛み」とは何か。わざわざさう書くのだから、普通の歯痛^{いた}の類ではあるまい。恐らく喉頭の病氣だらう。咽喉が痛んで、聲が涸れてしまつた傾城の哀れが、巧まずに出てゐると思ふ。こんな色よい文^{ぶん}を貰つては、伊左衛門が親を忘れ、身代を忘れて、われとわが身に、紙子を着てもふしぎはないと云ふ氣がする。この手紙を見て以來、慶吉は「廊文章」といふ芝居が、一層身に沁みて覺えるやうになつた。

——手紙はその位にして、日記やメモランダムはどうだらう。

「をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみんとするなり」といふ冒頭の文章にはじまる紀貫之の「土左日記^{とさのにっき}」や、藤原兼家の妻で、道綱母の書いた「かげろふ日記」或いは多艶多情の和泉式部による「和泉式部日記」それから半井桃水への戀を告白した樋口一葉の「日記」など、第三者の披見を豫想するか、しないかにかかはらず、やはり謎めいた文章が多く、しかも一生の祕事として、隠すべきことを、筆にのぼしてゐる。もつとも、才たけた和泉式部などは、わが灼熱の戀を一日も胸に秘めては居られないはうで、彼女が洗ひざらひ、喋つてしまふのはわかるものの、紫式部のやうな分別のある婦人でも、御堂関白道長に云ひ寄られ、一夜彼を渡殿の戸口に立たせて、夜もすがらその扉を、水鶏^{くひな}のやうに叩かせたといふとつときの祕話を、やはり包みきれないで、その日記の中に告白してゐるのは、どうにもならぬ人間の告白癖

の然らしめるところでもあらうか。

紫式部が道長の戀を拒絶したといふ話は、もつばら、この日記を據りどころにしてゐる。

然し、一夜は拒絶したが、次の日は彼の戀を受け入れたかも知れない。そして、日記には書かすにおくといふこともありうる。人間のすることや書くことは、この程度に曖昧である。が、拒絶の事實は、日記の上にあつて、承知の事實は、文章にあらはれてゐないのであるから、歴史としては、表面にあらはれたことのみを採上げ、想像される部分は、科學的證左がないといふ理由で、斥けられてしまふ。即ち紫式部は當時の宮廷女人の中で、最も志操堅固な才女として、折紙をつけられる。そして時の最高實力者である道長も、彼女だけには振られたといふ定説が成り立つ……。けれども、謎は謎として、残される。道長のやうな男が、一晩女の拒否にあつたからと云つて、それで戀をあきらめる筈はないといふ氣もするからだ。

と同時に、日記といふものが、自分の都合のいいやうに、いかやうとも書けるものだからである。でありながら、それが長い期間傳承された稀少價值のものとなると、やはりそこに書かれたことだけを信用しなければならなくなる。

では、兼好法師の隨筆や西行の歌集はどうであらうか。彼らの告白には、どれほどの眞實が存するものか。

慶吉は、數年前に、東海道をドライブし、小夜の中山峠を越したことがある。そのとき新古今和歌集の

「東の方にまかりけるによみ侍りける」

といふ詞書のあとに、

「年たけてまた越ゆべしと思ひきや命なりけり小夜の中山」なる西行の歌のあることを思ひ出

したのが機縁で、西行の戀人は誰だらうと、さまざまに想像したことがあつた。

この歌の出來たのが、文治二年八月の頃といふから、西行六十九歳の老境だ。これより四十數年前の康治二年に、彼は出家入道していくばくもなく、東國行脚を試みたとき、この中山峠を越してゐるので、文治は二度目。それも壽命あつての故に、再びこの山を越し、おのづから感慨を催したので、右の歌が出來た。

然るに、西行の出家の動機は、つひにまだ、判然としてゐないのである。慶吉などは、旧制高校時代に「新古今早わかり」といふやうなもので、西行は堀川の局に失戀して、遁世したとやらの俗説を聞かされ、そのままそれを鵜呑みにしてゐたが、これは全くの臆斷で、堀川は西行が八歳のときに出來上つた金葉集の有名な女歌人であるから、どう數へても、十四、五歳から二十歳ほど年上の女であるといふ考證が立ち、いかに飛躍をゆるしても、西行が堀川の局の若い愛人だつたといふこじつけは首肯できないと見られてゐる。

では、堀川の局の妹兵衛の局か。或いは同じく待賢門院の女官だつた加賀とか紀伊二位とか、新少將とか、安藝とかの中に、彼の戀人がゐたかどうかといふことになるが、たしかに彼女たちが西行の周邊に出沒した事實はあつても、その中に、西行の戀人らしい女が見当らないのである。

では一体、西行といふ法体の歌よみは、誰を戀し、誰にむかつて、あのやうに色つぽい歌をもしたのであらうか。考證學者は、みな西行の戀人としては、條件が不適格だと判じてゐる。とすると西行はおのれの戀愛や情事については、どのやうにもとれる數々の戀の歌をよみつづけただけで、その相手が何者なるか。何の某、何の局か、つひに一語も告白してはゐないのである。

慶吉には、それがいかにも興深く思はれた。さすがは西行、えらい坊主だと思つたものである。

——西行はこの峠を越し、大井川、安倍川を渡つて、東國は鎌倉の頼朝に會つた。その動機も祕密だ。更に陸奥に歩を伸し、平泉の藤原秀衡をも訪ねてゐる。

かつては北面の武士として、檢非違使にもなればなれる門地であり、射御の術にも長けてゐた西行が、すべてを弊履の如く抛ち、佐藤兵衛尉義清の名も改めて、二十三歳の青道心になつた理由は何か。絶対に口外すべからざる極祕の事情があつたのか。當時にあつては、殿上の夜毎の噂に、人の口の端から口の端へとわたつたものか。その風聞もいつしか立ち消え、すべて暗黙のうちに、包まれたのか。それとも義清の肚裏ひとつにをさめたことで、口さがなき京童の語り草にもならなかつたか。

只僅かに、「源平盛衰記」といふ軍記物語の一節に、

「そのおこりを尋ねれば、源は戀故とぞ承る。申すも畏れある上臈女房に思ひをかけ參らせたりけるを、あこぎの浦ぞと云ふ仰せを蒙りて、官位は春の夜、見果てぬ夢と思ひなし、樂しみ榮えは、秋の夜の月、西へとなぞらへて、有爲の世の契りを遁れつつ、無爲の道にぞ入りにける」

とある記事によれば、恐らく申すも畏れありといふ雲居の人の、いとほしみ給ふ女人と密かに契り、その尊い人から、

「伊勢の海 あこぎが浦に引く網も 度重れば人もこそ知れ」

と極めつけられたので、もはや包みかね、遁れざらましと觀念して、あつさり髪を剃りおとしたのではないか。「度重れば云々」とは、みごとに痛いところを衝かれたものであるが、これ

とても、軍記作者の月並な推理にすぎないと見れば、直ちに西行發心の神祕を解決する唯一のキイとは断定するわけに參らない。

吉田兼好の一念發起も、どうやら曰くありげなものであるが、考證によつては面白い話が出てくる可能性を藏するものの、くだくだしいから、ここでは省いておく。

要するに人は一生かかつて、決して他言しないで、腹藏したまま、その生涯を閉ぢることもあれば、告白懺悔の本能にかり立てられて、云はでものことを云つてのけ、更にご丁寧に、それを紙上に寫し出して、實在感を鮮明にしたい慾には弱いのが、人の世の矛盾でもあらう。よけいな文を綴り、いらざる日記をこころみ、無用のノートを書き散らすのがそれだが、その上に、もつとも甚だしいのが、自分のことを仔細に物語らうとする小説の類である。とすると、小説とは人間もろろの煩惱や慾深の、掃いて棄てる塵あくたの殘骸整理場と同じやうなものである。それと知りながら、俎の上におのれの裸身を横たへ、然るのち自分が自分に執刀する。

造作もないやうだが、實は至つて難かしい所業であつて、自分に都合のいいやうな告白懺悔に終つてしまふことも、ままあるからである。はじめは、眞實を立ち割つてゆくが、いつしかメスが、あらぬ方向に逸れて行き、面白をかしいだけのことになつてしまふ。これを試みたうちのほんの少數が、眞實の解剖に成功するだけである。いやいや、自分は成功したと思つても、その實、第三者を首肯せしめるには程遠いことが多いのだ。